

2011年3月11日に起きた地震、津波、それに連なる原発事故といった一連の「東日本大震災」。今年度は、どこに行っても3月11日以降わが国が抱えた(あるいは、抱えていた)課題を考えざるをえなかったが、早いもので、既に一年が経った。しかし、時は過ぎても、依然として数多くの行方不明者が存在していること、被災地における「復興」は、まだ緒に就いたばかりであることを、深く心に留めていかなければならない。

今回の震災、それに伴う人災を契機にして何が変わったのだろうか。少なくともこれまで「当たり前」なこととして捉えられてきたものを再確認し直す一つの起点となったのではないかと。教育の面においても、それは然りである。ただ、人々が疑いの念を持ってそれぞれの事象について見つめていこうという風潮になった一方で、「絆」に象徴されるような言葉で国家の活動に、その中身が精査されぬまま人々が巻き込まれていく負の可能性も秘めているという点は否定出来ない。それに反対するものは異端者として排除されていくのである。では、私たちが本当に必要としている「絆」とは、一体どのようなものなのであろうか、それを考えていく必要がある。

以上のような状況のもと、中等教育研究センターは、どのようにあるべきなのだろうか。今年度も活動する中で、高等学校における教育がいかに大学の学問と乖離しているかということを感じてきた。『学びの杜』に参加した高校生たちのほとんどが大学の学問そのものに触れるということも勿論よろこびを感じていたようである。しかし、「多くの同世代の仲間と『議論』しあうというスタイルを通して自己の学びや他者の学びが相互に触れ合い、精錬されていくこと」に深く感銘し、大学に進学し、学問と向き合っていくという思いを抱いたという生徒が多くの数いたという事実がある。彼らは、自身と向き合い、興味・感心を深めていくための「絆」を求めているのではないだろうか。上記の理由だけではないが、センターとして、これからも中等教育を巡る情勢を客観的に分析し、「正しい」知見を提供していく立場にあり続けなければならないという思いを確かにした。この紀要からそのようなセンターとしての所信を感じ取っていただけたらと幸いである。

最後となったが、本年も変わらぬご指導・ご鞭撻を賜った名古屋大学の関係部局の諸先生方にご場をお借りして御礼申し上げたい。  
(編集委員 永井)

---

---

## 中等教育研究センター紀要 第12号

2012年3月25日 印刷

2012年3月31日 発行

編集者・発行者 名古屋大学大学院教育発達科学研究科  
附属 中等教育研究センター  
代表者 植田 健 男  
名古屋市千種区不老町 〒464-8601  
名古屋大学教育学部附属中・高等学校内  
TEL&FAX: 052-789-2625  
E-mail: tueda@nagoya-u.jp  
印刷所 名古屋大学消費生活協同組合印刷部  
名古屋市千種区不老町 〒464-0814

---

---